

(1) 祖父が開いた西洋への窓

加藤の自己形成を考えるとときに、母方の祖父の存在を忘れるわけにはいかない。祖父は増田熊六（1866—1939）といい、陸軍の騎兵将校だった。熊六は自分の父増田明道（1836—1881、明治政府の海軍参謀、箱館戦争で海軍艦隊を指揮、陸軍参謀黒田清隆とともに榎本武揚と和平交渉に当たる）の家督を若くして相続し、私費でイタリアはミラノに留学した。ミラノでは歌劇にも親しみ、当時かの地で活躍したソプラノ歌手三浦環が歌うのも聴いている。日露戦争のさなか、オーストラリアに騎馬1万頭の買付けに派遣される。



ミラノから帰国後、渋谷・宮益坂中腹の御嶽神社の脇に、ヴィクトリア様式の洋館を建て、欧風の家具調度に囲まれ、身だしなみも欧風、香水を使う習慣をもち、女性との交際も盛んな暮らしを送った（右写真、祖父増田熊六）。退役後は、貿易商を営み、銀座に西洋料理店を経営した。祖父の家の近くに暮らした加藤には、身近に「西洋」があった。

祖父熊六は、加藤をはじめ、従兄弟の藤山櫓一（のちに外交官、駐英大使）、増田良道（のちに東北大学教授、冶金学）を伴って、東京の有名料理店に連れ歩き食べさせた。加藤は蓄音機から流れる歌劇の詠唱を幼児のときから聴いて育ったのである。

熊六はまた3人の孫を連れて活動写真（映画）を見せて歩いた。その映画はきまって西洋

映画だった。映画はその土地の風景も風俗も、言葉も習慣も、映し出すものである。西洋映画を見る習慣を小学生から身につけ、のちに加藤は「映画は西洋への窓」だったと述べている。

このように身近に「西洋」を感じながら育った加藤は、戦後にフランスへ留学することになり、パリへ着いたとき「西洋の第一印象は、私にとって遂に行きついたところではなく、長い休暇の後に戻ってきたところであった」と書いた。その「西洋への窓」を開いたのは、加藤自身というよりもむしろ祖父熊六であった。